

無気力が下田式性格検査尺度に与える影響

—重回帰分析総当り法における説明変数の選択と検討—

永田 正明

第一工科大学 共通教育センター

The Effect of Helplessness on the SHIMODA Personality Inventory Subscale

Masaaki NAGATA

Common Education Center, Daiichi Institute of Technology

要約

本研究では高校生の呈する無気力感が、SPI下田式性格検査の下位尺度に対して影響を与えるかどうかについて重回帰分析により検討することを目的とした。前回研究の「無気力が下田式性格検査尺度に与える影響」(永田, 2020)結果から、無気力尺度が下田式性格検査尺度をわずかながら予測することを確認できた。ただしこれらの結果は偏相関分析により、1つの変数に対する1つの変数だけの変動について相関の強さだけを測定する手法であった。そのため他の変数と比較した相関の強さや総合的な寄与率の大きさなどは明らかではない。そこで本研究では、下田式性格検査6尺度それぞれについて無気力6尺度を従属変数とする重回帰分析総当たり法を、Mallowsの C_p 統計量を基準にして実施し、より細かな検討を行った。

Key words : 重回帰分析総当り法, Mallowsの C_p 統計量, 下田式性格検査, 無気力

1. 問題

躁うつ病の精神病理学が日本で聞かれるようになったのは1950年代であり、1960年代からは躁うつ病の発病状況論が展開された。躁うつ病型の精神疾患と異なる点の一つに発病の「状況因」がある。この「状況因」は身体症状や精神症状とともに取り上げられる重要な診断に係わるものであるといった概念は現在でも認められている。少々残念なことは、DSMⅢにて内因性うつ病というカテゴリーを削除し、うつ病のサブタイプにメランコリー型という分類を追加したのに、DSMⅣではこの診断基準が廃止されたことである。ところで日本精神病理・精神療学会シンポジウム(2013)では「下田の執着性格の今日的意義」が研究協議メインテーマともなったことや、現代の日本における「執着性格」の現象形態と、それに関連する病態についての検討は、精神病理学に要請された課題であるとしている(玉田, 2018)。このように日本国内における臨床現場では、依然として笠原・木村分類のような患者の全体像を掌握することの必要性が国内の多くの精神科医からも叫ばれている。

2. 目的

国内精神科医がその臨床経験から病前性格的視点の必要性を提唱し、それを質問紙法で測定しようとするものとしてSPI下田式性格検査がある。SPI下田式性格検査の下位尺度にある病前性格特性と高校生の呈する無気力感との関係について考察してみることは、青年期における無気力感が精神的健康にまで影響を与えるものであるかどうかを測る一つの判断材料でもあると思われる。

回帰分析に当たってパスの方向性が重要であるが、今回無気力感は性格特性よりも形成時間としては短いものであろうと仮定して、無気力感がSPI性格特性に影響を与えるパスとした。

前回研究「無気力が下田式性格検査尺度に与える影響」(永田, 2020)結果から以下の点が確認できた。Table1にあるように無気力尺度のうち、下田式性格検査尺度に最も影響を与えていると考えられるものは、「意欲減退・無力感」尺度から「自己顕示性格」への正の影響であった。次に「消極的人間関係」尺度から「自閉性格」への正の影響もあった。更に「打込む領域の欠如」尺度から「同調性格」へは負の影響が有意であった。これらは偏相関分析により、1つの変数に対する1つの変数だけの変動について相関の強さだけを測定するものであった。そのため他の変数と比較した相関の強さや総合的な寄与率の大きさなどは明らかではない。そこで本研究では、下田式性格検査6尺度それぞれについて無気力6尺度を従属変数とする重回帰分析を、MallowsのCp統計量を基準にして実施した。なおCp統計量は値が小さいほど適合度が良い回帰式を示す。

3. 方法

被験者：

A県内2高校の1年次～2年次163名(男子98名、女子65名)

無気力質問紙：

抑うつ症状や気分を測定する自己記入式尺度については、外国版のBDI(Beck Depression Inventory, 1996)、Kazdinらの絶望感尺度(The hopelessness scale for children, 1986)、SDS(Zung Self-Rating Depression Scale, 1965)、またこれらの日本語版などが知られている。何れも無気力の気分や症状そのものを測定するものとして優れているが、健常な高校生の日常的に見られる無気力を測定するものとしては、中澤・宮下(1995)の作成した無気力質問紙の方が適していると考えた。中澤らの尺度は高校生・大学生を対象に、日常生活における無気力の程度を多面的に捉えることを主眼としているので、無気力の分野(下位尺度)をできるだけ多くとらえられるだろうと予測されるため本尺度を選定した。本質問紙は以下の5側面から尺度を構成している。1「授業・学習態度・テスト有能感」、2「生活のリズム・疲弊・身体不調」、3「人生目標・将来の見通し」、4「達成度・動機づけ・自己効力感」、5「社会的場面での非能動性・引きこもり」。

SPI下田式性格検査：

標準版成人用1987年版、日本文化科学社。下位尺度は「S：自閉性格」「N：神経過敏性格」「U：自己不全性格」「I：執着性格」「C：同調性格」「H：自己顕示性格」「L：虚偽尺度」であり、それぞれ10項目ずつからなる。本検査の構成概念として下田(1957)は以下の6つの性格特徴を述べている。(1)自閉性格S：現実逃避・孤独・非社会的・無口・明朗性なく・嫌人的で自己を開放することがない。協同的な仕事を嫌い、運動や遊戯に興味がない。(2)神経質N：刺激に対して普通以上に過敏に反応する傾向を特徴としている。神経衰弱は一時的の病気で休養によって早晩治癒するに反し、神経質は素質の現われであるから程度の軽減することはあっても完全消失は困難で生涯持続する。(3)内向性格(自己不全性格)U：基調は劣等感と名付ける不安危惧の感情である。この性格者は当然無口・孤立的となるから外観が自閉性格者と似ている。自閉性格者は嫌人的であり人を避けるが、内向性格者は人を嫌っているのではなく、劣等感に抑制されて行動できず遠慮している。(4)執着性格I：仕事に熱心で一旦始めたら寝食を忘れて徹底的にやり遂げるまでは止めない傾向があり、義務・責任・正義感が強く、正直で真面目で几帳面な性格で自己の利害得失を無視しても奉仕する。(5)同調性格C：明朗快活・善良・親切・社会的で知人が多く、常識的・現実的・世俗的・活動的等の特徴とする。(6)ヒステリー性格H：

感情や欲望が人一倍露骨に大げさに表現される。空想と現実と区別せず、周囲から夢想家・ほら吹き・虚言者などと思われる。意志の独立性が弱く気分や環境の影響に支配され恒常性がない。

実施日：

1回目は平成9年10月に、2回目を平成10年10月に、学級担任監督下で記名式として実施した。

4. 結果

無気力因子分析結果

33項目を最尤法により固有値1.0を参考に6因子が適当と考えプロマックス回転を施した。因子負荷量0.35以上を目安として、因子名は、第1因子「意欲減退・無力感」、第2因子「消極的人間関係」、第3因子「将来の展望の欠如」、第4因子「消極的活動性」、第5因子「学習意欲の欠如」、第6因子「打込む領域の欠如」と解釈された。内的整合性は、クロンバックのアルファ係数により算出した。第1因子よりそれぞれ、.73 .75 .81 .67 .63 .60であった。第4、第5、第6因子のアルファ係数がやや低いが、項目数が4~6と少ないわりに因子負荷量はあるので、6因子解の尺度構成とした。SPI性格検査についても念のため因子分析(主因子法、バリマックス回転)を行ったが、ほぼ完全に標準版の下位尺度どおり6因子(虚偽尺度まで入れて7因子)に分かれて性格特性を同定できたので、標準版の6因子それぞれ10項目の合計得点を分析に使用した。

Table 1には1年間という2時点で測定を行い、1回目と2回目のSPIの6尺度及び無気力6尺度について偏相関係数を示した。ここでは、SPIのうちS、N、C、Hでのみ偏相関係数が有意となっていることに注目した上で、Table 2以後の重回帰分析を実施した。

Table 1 1回目無気力尺度と2回目SPI尺度との偏相関係数

	SPI下位尺度					
	S	N	U	I	C	H
意欲減退・無力感	.03	.14 [†]	.06	-.05	.02	.25***
消極的人間関係	.19*	.00	.05	.10	-.06	.06
将来の展望の欠如	.02	-.05	.12	.04	-.09	.02
消極的活動性	.03	-.03	.03	-.01	-.10	.08
学習意欲の欠如	.04	-.11	-.10	-.04	.00	.04
打込む領域の欠如	.12	.14 [†]	.08	-.04	-.16*	.11

***P<.001 *P<.05 †P<.1

Table 2 重回帰分析結果(目的変数S;自閉性格)

取込変数	C(p)	R2 乗	無気力尺度の標準偏回帰係数					
			M11	M12	M13	M14	M15	M16
1	0.64	0.27		0.48				
2	1.16	0.27		0.47			0.11	
2	1.64	0.27		0.48	-0.07			
3	1.65	0.28		0.48	-0.09		0.13	
2	2.19	0.27	0.03	0.46				

「M12：消極的人間関係」尺度から「S：自閉性格」への偏回帰係数が .48 程度であり、Table1 の偏相関係数値も有意であったことから、自閉性格に対する影響はあると思われる。寄与率 (R² 乗値) と C p 統計量も本研究での値としてはまずまずの値を示している。説明変数の 2 番目の候補として「M15：学習意欲の欠如」が非常にわずかながら偏回帰係数 .13 程度出てはいるが、寄与率が変化していないため無視できる。Table 1 では「打込む領域の欠如」の偏相関係数が .12 と有意ではないが現れていたものが、Table 2 の結果には反映されていない。このことは、偏相関が双方向の相関値を算出するのに対し、回帰分析ではパス方向まで考慮される結果であろうと考えられそうである。Table 2 から、説明変数としては「M12：消極的人間関係」尺度だけが自閉性格に影響すると言えそうである。

Table 3 重回帰分析結果 (目的変数N；神経過敏性格)

取込変数	C(p)	R2 乗	無気力尺度の標準偏回帰係数					
			M11	M12	M13	M14	M15	M16
3	1.28	0.13	0.20		-0.13		-0.22	
2	2.45	0.12	0.18				-0.24	
4	3.11	0.13	0.19		-0.13		-0.22	0.04
4	3.20	0.13	0.20	-0.02	-0.13		-0.22	
4	3.25	0.13	0.19		-0.13	0.02	-0.22	

「神経過敏性格」自体は無気力概念とは直接的に結びつきにくいと考えられそうである。神経質であることと、よく考えてから行動を起こすことや高校生としての重要な学業に敏感であることはむしろ必要なことでもある。そういった意味において「M15：学習意欲の欠如」がなくなることが、仕事や部活動などにプラスに影響し健全な状態であると解釈できそうである。その他「M11：意欲減退・無力感」や「M13：将来の展望の欠如」といった標準偏回帰係数も出現してはいるが、寄与率は .13 程度と小さめであり、Table 1 での偏相関との差はないようである。Table 1 で「M16：打込む領域の欠如」の標準偏相関係数が .14 と有意傾向で現れていたものが、Table 3 の標準偏回帰係数では反映されていない。

Table 4 重回帰分析結果 (目的変数U；自己不全性格)

取込変数	C(p)	R2 乗	無気力尺度の標準偏回帰係数					
			M11	M12	M13	M14	M15	M16
3	3.68	0.10	0.18		0.19		-0.24	
4	3.75	0.11	0.16	0.11	0.19		-0.24	
5	5.01	0.12	0.15	0.12	0.17		-0.25	0.11
4	5.01	0.10	0.17		0.17		-0.24	0.10
4	5.60	0.10	0.17		0.19	0.04	-0.24	

Table 4 の標準偏回帰係数を見ると、「M15：学習意欲の欠如」が「自己不全性格」にマイナスの影響をわずかに与えているようである。この「M15：学習意欲の欠如」が「自己不全性格」にマイナスの影響を与えることの解釈は、学習意欲が出てきて劣等感が弱くなってきた生徒の存在が考えられそうである。寄与率が.10程度と小さいことから、被験者の全体数で考えた場合に自己不全感や劣等感を感じるようになった生徒数は少なく、逆に意欲的になり劣等感を持つ生徒数が減っている可能性もわずかに残されてはいる。いずれにしてもC p 統計量が大きいため統計的に結果として判然としない。

Table 5 重回帰分析結果（目的変数 I；執着性格）

取込変数	C(p)	R2 乗	無気力尺度の標準偏回帰係数					
			M11	M12	M13	M14	M15	M16
3	-0.21	0.04		0.09				-0.18
4	-0.07	0.02						-0.17
5	1.43	0.04		0.09		-0.05		-0.17
4	1.62	0.04		0.09			-0.04	-0.17
4	1.63	0.02			0.04			-0.18

「執着性格」に対する無気力の影響は、寄与率がかなり小さく統計的にほとんど結果の解釈ができない。本結果からは、「執着性格」因子には無気力感の影響を与えない概念であると考えられそうである。

Table 6 重回帰分析結果（目的変数 C；同調性格）

取込変数	C(p)	R2 乗	無気力尺度の標準偏回帰係数					
			M11	M12	M13	M14	M15	M16
3	3.83	0.15	0.12	-0.26				-0.29
4	4.38	0.16	0.14	-0.25		-0.12		-0.28
4	5.18	0.15	0.13	-0.25	-0.06			-0.27
4	5.21	0.15	0.12	-0.26			0.07	-0.29
5	5.65	0.16	0.14	-0.25		-0.12	0.08	-0.29

Table 6 を見ると、「M16：打込む領域の欠如」や「消極的友人関係」から「同調性格」への標準偏回帰係数はマイナスであった。Table 1 の結果では「消極的友人関係」の偏相関係数は有意でなかったが、重回帰分析での標準偏回帰係数は「M16：打込む領域の欠如」とほぼ同じ値である。この結果から、「消極的友人関係」が消失することで「同調性格」にプラスの影響が少しあると解釈できそうである。そしてそのような傾向にある生徒、つまり友人関係がうまくいき結果として同調性格を形成しつつある生徒の方がそうでない生徒よりも数が多いか、または2回の質問紙調査でのリッカート変化総量が多かったのかもかもしれない。

また、この「同調性格」を目的変数にとり重回帰分析を行うと、総当り法であるにもかかわらず

最初の変数候補から同じ3変数が出てきているが、この3変数「M11:意欲減退・無力感」, 「M12:消極的人間関係」, 「M16:打ち込む領域の欠如」が1組のややまとまりをもったものである可能性を示唆しているのかもしれない。

Table 7 重回帰分析結果(目的変数H;自己顕示性格)

取込変数	C(p)	R2 乗	無気力尺度の標準偏回帰係数					
			M11	M12	M13	M14	M15	M16
1	-1.64	0.14	0.24					
2	-0.13	0.14	0.25		-0.05			
2	-0.10	0.14	0.25				-0.07	
2	0.06	0.14	0.23			0.06		
2	0.28	0.14	0.25	-0.02				

「M11:意欲減退・無力感」尺度からは「自己顕示性格」への影響が少しあると考えられる。このこと Table 1 でも同様な結果であったが、特に高校生段階では生徒がやる気を失うと問題行動に発展していくケースが多く見られる。そして、そういった問題行動が顕在化する前段階として自己顕示的態度を示すことはよく見られる。例えば、服装や頭髪の乱れや学校以外の有職・無職少年との付き合い、親や教師に対する言葉遣いの荒さなどである。一般的に高校2年生の2学期が、生徒の粗悪な面や問題行動が最も現れやすい時期でもあるので、そのように考えるとこれらの結果は理解できそうである。

参考文献

- 永田正明 2021 無気力が下田式性格検査尺度に与える影響. 第一工業大学研究報告, 第33号; p 97-102.
- 中澤潤・宮下一博 1995 青年期の無気力 -高校生・大学生を対象とする無気力尺度の開発- 千葉大学教育学部教育相談研究センター年報, 12; 11-19
- 玉田有 2018 執着性格の構成過程に関する考察. 精神神経学雑誌, 120; p11-24.
- S P I 研究会 塩見邦雄・吉岡千尋・田中宏尚 1987 下田式性格検査解説書. 日本文化科学社.
- 竹内啓 監修 芳賀敏郎・野澤昌弘・岸本淳司 SASによる回帰分析. 東京大学出版会.
- 牛島定信 2013 精神分析からみた執着性格(下田). 臨床精神病理, 第34巻; p78-83.